



Data 2023-100

監督・脚本: ブリュノ・シッシュ
出演: イヴァン・アタル/ピエール・アルディティ/ミュウ＝ミュウ/キャロリーヌ・アングラード/パスカル・アルビロ/ニルス・オトナン＝ジラル

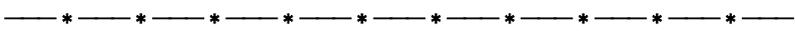
👁️👁️ みどころ

小泉純一郎元総理のように、政治家は世襲が可能だが、才能がものを言うクラシック音楽の世界では、2代、3代に渡る指揮者は珍しい。

しかして、ある日、父親フランソワ・デュマールのリハ中に、ミラノのスカラ座から音楽監督就任の電話が入ったからすごい。有頂天になった父親がイタリア行きの夢を膨らませる中、息子のドニ・デュマールに面会したスカラ座の総裁は、何と“デュマール違い”だったと伝えたから、ビックリ！いくら秘書の手違いだとしても、天下のスカラ座はどんな責任を取るの？私はそう思ったが、物語の焦点は、その告知に悩み苦しむ息子の姿になっていくから、アレレ、アレレ・・・。

そもそも“マエストロ”とは一体何？秦の始皇帝は春秋戦国時代（BC770～BC221年）を平定して、中華統一を実現させたが、それは一体なぜ？他方、「項羽と劉邦」を見れば“両雄並び立たず”の意味がよくわかるから、そもそも『ふたりのマエストロ』はおかしいのでは？

もっとも、本作はそれなりの感動作に仕上がっているから、そんな矛盾を声高に指摘するのは私だけ・・・？



■□■私の趣味はレコード鑑賞！しかし、その時間は？■□■

1949年1月生まれの私は、1974年4月に弁護士登録してから49年と6ヶ月が経過した。登録から数年間の平日は法廷活動や弁護士会の委員会活動で忙しかったし、土日祝日や年末年始は弁護団活動や青法協活動等で忙しかった。そのため、結局1年間を通じて毎日忙しかった。

しかし、そんな中でも登録直後の私は、趣味のレコード鑑賞のため、友人と共にオーデ

イオ店やレコード店に通い、大量のレコードを買い漁っていた。貧乏だった大学時代は、十数枚しか持っていないレコードを何十回と聞いていたが、レコードを買う程度のカネに不自由しなくなると、みるみるうちにその数は数十枚となり 100 枚を超えてきた。ところが、今度はそれを聞く時間がなくなったから、結局一度も針を落としたことのないレコードも多い。

■□■指揮者あれこれ！“ふたりのマエストロ”は少しヘン！■□■

1970年代のクラシック音楽鑑賞家の必需品（必読書）は『レコード芸術』だった。当時は、ベルリン・フィルのヘルベルト・フォン・カラヤン（1908年生）やニューヨーク・フィルのレナード・バーンスタイン（1918年生）が“巨匠”で、インド出身のズービン・メータ（1936年生）、アルゼンチン出身のダニエル・バレンボイム（1942年生）、イタリア出身のクラウディオ・アバド（1933年生）、そして、日本の小澤征爾（1935年生）等々が“新進気鋭”とされていた。NHK交響楽団や大阪フィルハーモニー等、明治維新後、クラシック音楽の育成にも力を注いできた我が国は優れた交響楽団を持っていたが、やはり世界に比べると分が悪く、私は1枚も購入していない。

多方、私は1984年に株式会社オービックの顧問弁護士に就任したが、オービックは毎年、東京と大阪でクラシックのコンサートを開催していた。そのため、“炎のマエストロ”と称されていた指揮者の“コバケン”こと小林健一郎氏や、彼の親しいピアニスト・ヴァイオリニストと年に1、2回親しい時間を過ごしていた。

考えてみれば、マエストロ（＝巨匠）という言葉が使われ始めたのはいつ頃からだろう？これは、芸術家、専門家に対する敬称で、特に西洋クラシック音楽やオペラの指揮者、音楽監督、作曲家、師匠の敬称だが、それを前提とすれば『ふたりのマエストロ』と題する本作のタイトルは少しヘン！なぜなら、前述した通り、有名な指揮者は世界中に多いから「ふたりのマエストロ」はヘン。逆に、1つの交響楽団に常任指揮者は1人だけだから「ふたりのマエストロ」はヘンだ。私はそう思ったが、クラシック音楽に人並み以上の興味があり、造詣が深い（？）私にとって、本作は必見！

■□■息子に栄えあるヴィクトワール賞が！父子の確執は？■□■

本作冒頭、地元で活躍中のフランス人指揮者ドニ・デュマール（イヴァン・アタル）が大きなコンサート会場で、フランスのグラミー賞にも例えられるヴィクトワール賞を受賞したことに謝辞を述べてオーケストラの指揮に入るシークエンスが登場する。演奏会終了後、ドニが妻のジャンヌ（パスカル・アルビロ）、息子のマチュー（ニルス・オトナン＝ジラル）らと共に自宅で受賞を祝ったのは当然だが、他方で、ドニは楽団でヴァイオリンを担当している女性ヴィルジニ（キャロリーヌ・アングラーデ）と“デキている”ことが、いかにもフランス映画らしく（？）スクリーン上で堂々と表現されるから、アレレ・・・。

他方、ドニの父親であるフランソワ・デュマール（ピエール・アルディティ）は今や超ベテランの域に達した指揮者だが、今日もベートーヴェンの交響曲第9番の第2楽章のり

ハーサルでオーケストラに対して厳しい指導をしていたから、ある意味で立派なものだ。ところが、そのリハーサルの最中に、誰かの携帯電話が鳴り始めたから、フランソワは激怒！この怒りっぷりを見れば、鳴ったケータイの所持者は即オーケストラをクビ！そう思ったが、なんと、そのケータイはフランソワのものだったからアレ・・・。

普通はそんな状況下でフランソワがケータイに出ることはできないはずだが、(一般的に)交響楽団における指揮者は絶対的権力者である上、フランソワは特にそうだったらしい。そのため、フランソワは楽団員に遠慮しながらケータイに出たが、そこでフランソワに伝えられたメッセージは、あっと驚くべき素晴らしいものだった。さあ、それは一体ナン?

■□■俺にだって“スカラ座”から音楽監督就任依頼が!■□■

私は来年4月から弁護士生活50年目に入るが、フランソワも40年以上の長きに渡ってキャリアを築いてきたベテランだ。もっとも、フランソワにはヴィクトワール賞受賞のような“実績”はなかったから、息子の活躍を誇りに思いつつ、他方で、寂しいような妬ましいような気持ちを持っていたらしい。そのため、仕事仲間から「自慢の息子さん、快挙ですね!」と挨拶されても、フランソワは「今日の演奏は最悪だ!」と当たり散らす始末だった。すると、リハーサルでのあの激昂ぶりも、ひょっとしてそのせい・・・?本作導入部では、父も息子もパリの華やかなクラシック界でオーケストラの指揮者として活躍しているながら、その裏側に潜んでいる“父子の確執”がチラホラと描かれていくので、それに注目!

しかし、そんなフランソワのケータイで今伝えられたのは、夢にまで見た“世界三大歌劇場”であるイタリアのミラノ・スカラ座の音楽監督への就任依頼だったからすごい。奇しくも、この日はフランソワの誕生日。フランソワの妻でドニの母・エレヌス(ミュウ=ミュウ)や、ヴィルジニらが一同に会した誕生パーティは、一転して「スカラ座に乾杯!」と、家族全員がフランソワの快挙を祝福する最高の一夜となった。「息子がヴィクトワール賞なら、俺はスカラ座の音楽監督に就任だ。」「俺はまだまだ、お前には負けていないぞ!」。スクリーン上には、そんなフランソワの“内なる声”が聞こえてきそうだったが・・・。

■□■テーマは良しだが、脚本に欠陥が!スカラ座の責任は?■□■

オーケストラの経営が大変なことは、大阪におけるいくつかの交響楽団の盛衰を見ればよくわかる。しかし、“世界のスカラ座”ともなれば、その経営母体はしっかりしたもの!私はそう思っていたが、急遽、スカラ座のマイヤー総裁に呼び出されたドニが、フランソワへのスカラ座音楽監督就任依頼は、“デュマール違い”で、実はドニへの依頼の誤りだったと告げられるシークエンスを見てビックリ!何と、フランソワへの電話は、マイヤー総裁の秘書の女性が“デュマール違い”により誤って電話したという話だから、いやはや・・・。

そんなありえないような人為的なミスが、万一ホントに起きたとすれば、“世界のスカラ座”はどうすればいいの?それは、一刻も早くスカラ座の責任者(=マイヤー総裁)から

フランソワに電話を入れた上、謝罪に赴くことだ。ところが本作では、スカラ座音楽監督就任について、その後の具体的な事務連絡がないことに苛立つフランソワが、何度もマイヤー総裁に電話するも繋がらないシーンが登場する。まさか、マイヤー総裁は自己の大チョンボの尻拭いをフランソワの息子のドニに一任し、自分は頬張りするつもりなの・・・？

50年近くのベテラン弁護士の私には、“デュマール違い”によって起きた、そんな問題の本質と、その解決策がハッキリ見えるのだが、本作の監督のみならず脚本を書いたブリュノ・シッシュは、そんな問題の本質を直視せず、ストーリーを専ら“デュマール違い”の告知をマイヤー総裁から一任されたドニの苦悩する姿に集約していくから、アレレ、アレレ・・・。本作のテーマは良いのだが、そんな脚本は根本的におかしいのでは・・・？

■□■なぜ息子が“デュマール違い”の苦悩を一身に？■□■

マイヤー総裁から“デュマール違い”を告げられたドニは、「そんなことの尻拭いはマイヤー総裁自身が、自らの責任でやってくれ」と言うべきだが、結局それを言わず、何となくその告知を引き受けたような形になっていくので、本作中盤はそれに注目！しかも、面と向かってそれをフランソワに伝えられないドニは、苦し紛れに、夜中にそれを手紙にしたためのもの、酔っ払って眠ってしまい、そのまま手紙を放置していたため、息子のマチューに読まれてしまうという更なる大チョンボを！

そんな風に苦悩するドニに対し、フランソワの方は“心パりにあらず”状態で、既にACミランのシーズン・チケットを手配したり、長年連れ添った妻への“再度の求婚”と指輪のプレゼントまでしていたから、コトは深刻化を深めるばかりだ。ブリュノ・シッシュ監督が書いた脚本は、そんなスリリングな展開による、それまでも強かった父子の確執の更なる拡大という点では上出来だが、いささか問題の本質をズラしてしまっているのでは？そもそも、“デュマール違い”という大チョンボを犯したのはスカラ座だったはず。すると、フランソワへの電話が総裁自身ではなく秘書によるものだったとしても、その責任は天下のスカラ座にあるはずだ。しかるに、本作の展開（脚本）は、スカラ座の責任問題に頬張りしたまま、ドニが“デュマール違い”の苦悩を一身に引き受ける姿を浮かび上がらせていくから、アレレ、アレレ・・・。

そんな展開の中、ある日、ドニがスカラ座で共演する新たなヴァイオリニストと話をしているところに、妻と一緒にフランソワがやってくる中、“最悪の形”で“デュマール違い”が露呈することになるので、それに注目！

■□■父子の確執は頂点へ！だが、これはいくら何でもNG！■□■

『アマデウス』（84年）は、19世紀の宮廷音楽家サリエリが若き天才音楽家モーツァルトに対して抱く“嫉妬心”に焦点を当て、「それがモーツァルト死亡の原因になった」とする大胆な仮説を、美しい音楽と波乱万丈のストーリーの中で描いた名作中の名作だった。他方、父子の確執を描く映画は多いが、その確執の原因が父親の息子の才能に対する嫉妬心だったとする映画は珍しい。『ふたりのマエストロ』と題する本作の脚本を書いたブリュ

ノ・シッシェ監督の狙いが本当にそこにあったのかどうかは知らないが、スカラ座の音楽監督就任の要請が“デュマール違い”だったと悟ったフランソワは、2人きりで酒を飲みながら、一体何を話したの？

そこでの、フランソワからの最初の切り口は「俺とお前は似てる場所は何もない」だったし、それに対するドニの答えも「そうだね」だったが、続いてフランソワは「母さんが浮気していた時期があった」と話を続けていったから、アレレ、アレレ……。話はとんでもない方向へ。もしドニが生まれる前に、フランソワ夫妻の間でそんな“もめ事”があったとしても、ここでそんな話を、さも“訳あり”気味に話すのはいくらなんでもNGだろう。それを聞いたドニの反応は……。？そしてまた、それを言ってしまったフランソワの表情は……？

■□■意外なラストに拍手も！しかし私はこれもNG！■□■

現在、日本では原泰久の原作（人気漫画）を映画化した、東宝の娯楽巨編である『キングダム』シリーズの第3作『キングダム 運命の炎』（23年）が公開されているし、BS12では、8月16日から本場中国制作の全7話のTVドラマ『キングダム 戦国の七雄』の放映が開始された。私はこの手のドラマに見る、中国の権力闘争の物語が大好きだが、秦の始皇帝はなぜ誕生したの？また、中国の春秋戦国時代（BC770～BC221年）は、なぜ「戦国七雄の時代」、「合従連衡の時代」になったの？そして、秦国の若き王、嬴政（えいせい）はなぜ中華統一を目指したの？それは、自分がただ1人の絶対的権力者になるためだ。そして、それが世の中を平和にし、民を幸せにする唯一の道だと信じたためだ。

他方、考えてみれば、交響楽団の常任指揮者は1人と決まっているが、それはなぜ？それは、常任指揮者が絶対的権力者であるためだ。本作導入部では、フランソワが第9交響曲第2楽章のリハーサルで、団員を厳しく指導する風景が描かれるが、これはどのオーケストラでも同じ。ちなみに『セッション』（14年）（『シネマ35』40頁）は、クラシックではなくジャズの世界だったが、指揮者の絶対的権力を前提としたメチャ面白い映画だった。

しかして、今日はスカラ座の音楽監督に就任したドニがはじめて指揮棒を振る日。曲目はモーツァルトの「フィガロの結婚」だ。観客の拍手に迎えられてドニが登場！万来の拍手の後、さあいよいよ始まるぞ、となると、スカラ座の観客席は一瞬水で打ったような静けさに。そしてドニが指揮棒を振り始めると、アレレ、アレレ……。そこにもう1人登場してきたマエストロとは……？

「ふたりのマエストロ」による「フィガロの結婚」の演奏に、スカラ座の観客は万来の拍手だが、私に言わせれば、『ふたりのマエストロ』はやっぱナンセンス！秦の始皇帝が唯一無二の絶対権力者なら、ベルリン・フィルのカラヤンだってそれに同じ。そもそもオーケストラの指揮者（マエストロ）は1人に決まっているはずでは……？

2023（令和5）年8月28日記